

64. 鯉のぼり、命の連なり

医事万華鏡

毎年5月5日の

「子どもの日」が近づく

と、街には色とりどりの鯉のぼ

りが泳ぎ、子どもたちの健やかな

成長を願う明るい空気が広がります。

しかし私にとってこの日は、どこか静かな

思索へと誘う節目でもあります。というのも、幼い頃

にこの日を祝ってくれた父と母は、すでにこの世にはいないからです。

かつては無邪気に柏餅を頬張り、ただ祝われる側としてこの日を過ごしていました。けれど今では、祝うという行為の裏側にある「命の連なり」に思いを馳せるようになりました。父母がいて私が生まれ、そして次の世代へと命が受け継がれていく。その流れの中で、死は決して断絶ではなく、むしろ自然な帰結であると感じるようになりました。

誰もが死から免れることはできません。この単純で厳然たる事実は、普段の生活の中では意識の外に追いやられがちです。しかし、子どもの日という「生」を祝う日にこそ、「死」を見つめ直すことに意味があるのではないのでしょうか。

生と死は対立するものではなく、互いに支え合う関係にあります。限りがあるからこそ、今という時間はかけがえないものになるのです。

父は生前、「人は二度死ぬ。一度目は肉体が減びるとき、二度目は人々の記憶から消えたときだ」と語っていました。その言葉を思い出すたび、私は父母の存在を自分の中に生かし続けていきたいと願います。彼らの価値観や言葉、日常の何気ないしぐさまでもが、今の私を形作っています。そう考えると、死は完全な終わりではなく、形を変えた継続なのかもしれません。

私にとって、子どもの日には、未来を担う子どもたちの成長を願うと同時に、自分がどのように生き、何を次の世代へ手渡せるのかを問い直す特別な日。それは単に物質的な遺産ではなく、生き方や考え方といった目に見えないものの継承です。

鯉のぼりが風にたなびく姿を見上げながら、私は父母の面影を思い出す。そして、自分もまたいつかその流れの中に還っていく存在であることを静かに受け入れます。だからこそ、今日という一日を丁寧に生きたいものです。その意味で、子どもの日は、過去と現在、そして未来をつなぎながら、死生観を見つめ直す大切な機会であると言えるのではないのでしょうか。

(JMS主幹・野村元久)

